

帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.40

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

特集1	みなとびあのレファレンスについて	P.2~3
特集2	平成二十九年度企画展 え？展—近代絵画のわすれもの	P.4
歴史さんぽ	大山～榎町あたり	P.5
おすすめの一冊	「明治維新を読みなおす —同時代の視点から—」	P.5
みなとびあ 研究notes	高等女学校の広がり ～明治・大正期における現新潟市域を例に～	P.6
館長日記	長寿な倭人と高齢化社会	P.7
収蔵資料紹介	大正六年「大漁日誌」	P.7
博物館あちらこちら	西湖のヤナギ	P.8



4月8日企画展開幕日には行われた
「のそきからく」公開組立

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.40

たいけんのひろばプログラム

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・参加費・対象
4/30日 14:00～15:00	こいのぼりをつくろう	GW恒例のプログラム、こいのぼりと風車を作ります。	申込み不要・無料 材料がなくなり次第終了
5/5金祝・6土 14:00～15:30	カプトを折ってみよう	大きな紙で、かぶれるサイズ、ちょっと難しいカプトを作ります。 出来上がったなら、段ボール製の鎧を身に付けて、記念撮影します。	申込み不要・無料 材料がなくなり次第終了
5/7日 10:30～12:00	親子でみなとびあ 自然体験	みなとびあの敷地内の身近な自然にふれながら、親子で楽しく遊びます。	要申込み・先着15組・無料 2歳以上の未就学児と保護者
5/13土 10:00～12:00	みなとびあワラ部	ワラソウリの自主練習をします。 初心者の方もどうぞ。	ワラ部員が対象です。
5/14日 14:00～15:30	こども歴史クラブ 「オリジナルの花押づくり」	戦国武将が用いた花押はどんな意味があるのでしょうか？ 花押について学んで、自分の花押をデザインしてみましょう。	こども歴史クラブの 部員が対象です。
5/21日 14:00～15:30	とんぼ玉づくり	ガラスをガスバーナーで溶かして、とんぼ玉と呼ばれるガラスビーズを作ります。	申込み不要・小学生以上・ 当日先着15名・100円
5/28日 14:00～15:00	江戸紋切りを楽しもう	江戸時代の人々が楽しんだ、紙を折って切り取ることで、いろいろな形を作る 遊びを体験します。	申込み不要・無料 材料がなくなり次第終了

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。

開催中の企画展 え？展—近代絵画のわすれもの

「絵画」と聞くと、額縁に入れて鑑賞されるものと思われがちですが、「実用の
絵」は生活の中に無数にあります。その歴史的背景を追い、「近代絵画」の死角
を探求してみましょう。

【会期】2017年4月8日(土)～5月28日(日)
【休館日】毎週月曜日(5/1(月)は開館)・5/9(火)
【観覧料】大人500円[400円] / 大学生・高校生300円 [240円] /
中学生・小学生200円 [160円]
*中学生・小学生は、土・日・祝日の観覧料が無料です。
*[]は団体料金(20人以上)
*企画展観覧料で常設展示もご覧いただけます。

【主催】新潟市歴史博物館 / 新潟日報社
【共催】NHK新潟放送局

- 【関連事業】
- 絵描き職人の実演トーク
日時：4月29日(土) 午後1時30分から
講師：金井二郎(画家、印刷画工) 会場：1階企画展示室
申込み不要、当日の観覧券が必要です(小・中学生無料)。
 - 学芸員による公開講座
①「日本美術の“使い方”」
日時：5月20日(土) 午後1時30分から 講師：中村里那(当館学芸員)
②「近代新潟の“非”美術史」
日時：5月27日(土) 午後1時30分から 講師：木村一貫(当館学芸員)
*①・②ともに会場は2階セミナー室、事前申込み不要、
定員100名(先着順)、参加無料
 - 学芸員による展示解説会
毎週日曜日 午後1時30分から 会場：1階企画展示室
申込み不要、当日の観覧券が必要です(小・中学生無料)。

次回企画展 地図コレクション展 「明治・大正・昭和の新潟市」

館が所蔵する新潟市の地図を一室に展示し、明治・大正・昭和
への時代の流れとともに移り変わる街の変化を追います。また、
古い街並みの写真をあわせて展示します。

【会期】2017年6月10日(土)～6月18日(日)
【休館日】6/12(月) 【観覧料】無料 *常設展の観覧は有料です。
【主催】新潟市歴史博物館

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月
第4日曜日にお話します。

【時間】13:30～15:00 【会場】本館2階セミナー室
【申込】不要(当日受付・定員80人程度) 【資料代】100円

- 5月の講座：5月28日(日)
「<<仮想まちあるき>>水上バスで歴史めぐり」
講師：小林隆幸
- 6月の講座：6月25日(日)
「堀直寄と沼垂」
講師：田嶋悠佑

お知らせ
資料燻蒸のため休館いたします
5月29日(月)～6月5日(月)

博物館あちらこちら 西湖のヤナギ

本館の前には、今はなき西堀に見立てた堀
が整備されています。西堀には、初代新潟奉
行の川村修就が長崎から取り寄せた中国の
西湖のヤナギが植えられていたと伝えられ
ています。その縁もあり、平成7年に西湖が
ある杭州市から新潟市にヤナギが届けられ
ました。みなとびあに植栽されているヤナギ
はその時のものです。川村の思いを伝えるヤナギです。



編集後記 本館1階に情報ライブラリーがあるのをご存知
でしょうか？企画展示室の向かいにあります。
企画展を見にいらっしやった際に、その存在に気づかれる方が多いよう
です。40号では、ここを活用したレファレンス対応についてご紹介しまし
た。ライブラリーは無料で入れるスペースです。ぜひふらりと立寄り、郷土
の本を眺めたり、古い映像を見たりしてみてください。(中村)

お問い合わせ・申込みは博物館まで
新潟市歴史博物館 みなとびあ
〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始(12/28～1/3)
【開館時間】(4-9月) 9:30～18:00 / (10-3月) 9:30～17:00

みなとびあ歴史発見プロジェクトは、「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NST 日和山五目 北陸ガス NSGグループ Water Shuttle 本間組
新潟造船 田中屋本店 第四銀行 堀川 新潟市いっしょ

帆檣成林「はんしょうせいりん」第40号
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷／株式会社博進堂 発行日 平成29年4月26日

レファレンスの概要

新潟市歴史博物館の利用者対応の一つにレファレンス対応があります。レファレンス (reference) は参照、参考という意味で、当館のレファレンス対応は利用者からの質問に応じた歴史、民俗についての文献を紹介し、場合によっては当館所蔵の史料の閲覧などを行っています。

レファレンスサービスは来館者だけでなく、電話での質問など非来館者にも行っています。なお、来館者の場合は基本的に情報ライブラリー (以下、ライブラリー) で対応しますが、展示に関する質問の場合は展示室で対応する場合があります。平成二十七年年度の対応件数をみると、集計しているライブラリーだけで一二件 (ライブラリー利用者は平成二十七年年度二、七六一人) でした。電話・メールなど非来館者への対応については、件数を集計していませんが、ライブラリーの件数を超えている印象があります。質問内容は新潟市の歴史、民俗に関するものが中心ですが、広く日本史全般に関する質問をいただくこともあります。

レファレンス対応の体制

来館者のレファレンス対応の場となるライブラリーには司書が常駐しており、司書が不在の場合は学芸員が交替で詰めて常に対応できるようにしています。電話かメールの場合は学芸員が、まず対応することとなります。ライブラリーには来館者が図書を閲覧できるテーブル席があります。閲覧席周辺と書庫内を合わせると現在約四八、〇〇〇冊の図書・雑誌の蔵書があり、質問に応じて文献を紹介します。蔵書はライブラリー備え付けのパソコン、または当館ホームページから検索することが出来ます。なお、来館者はライブラリーのみ利用の場合は、無料で利用することが出来ます。図書館に似た施設ですが、貸し出しや他の図書館からの資料の取り寄せなどは行っていません。

当館の蔵書は書架を埋めているように見えますが、新潟県立図書館や新潟市立図書館の蔵書数に比べると、多いとは言えません。ただ、新潟市の歴史民俗に関する地域資料と全国の博物館の交換図書として収集された展覧会図録の多さが特徴と言えます。

レファレンス対応の実際

これまでレファレンスに寄せられた質問は、展示についての質問や、新潟市の歴史民俗全般に関するもの、先祖に関するものと多岐にわたっています。利用者については、年配の方や学生、マスコミ関係者が多い印象があります。また利用者は市内在住者が多いものの、県内の他の市町村や県外からの問い合わせも毎年継続的にあります。

レファレンス対応を実際に行っていくと、どのように対応するか考えさせられる場面に突き当たります。

まず、利用者の意図をどのようにくみ取るかです。知りたい情報や閲覧したい資料が明確であるとは限らず、むしろ漠然とした疑問を解決したいという方が多いのです。質問が漠然としている場合、利用者自身が何を知りたいのかはつきりしていない場合もあります。学芸員は図書館の司書のように利用者が何を知らたいのか会話の中で探り、引き出していく必要があります、その技量も求められます。

当館の側にも課題があり、例えば新潟市の歴史に関する古文書や写真など現物資料を持っていないかという質問が稀にありますが、こうした質問が生まれる原因の一つに当館が所蔵資料の目録を公開していないことがあります。目録があれば利用者もより明確に質問ができるのでし

す。当館独自で閲覧できる地域資料として、初代新潟奉行川村修就家に伝わった新潟県指定文化財「川村家文書」約四、〇〇〇点の写真コピーがあります。

展覧会図録は、全国すべての博物館にわたるものではなく、地域や館でばらつきがあるものの、新潟県内の他の図書館に所蔵がないものも少なくありません。受贈図書を閲覧に供している博物館自体全国的に見ても多くはなく、当館で自慢できるものの一つと思います。

これらに加えて歴史民俗一般に関する蔵書も所蔵していますが、数は少ないので止むを得ず他の図書館を紹介する場合があります。また、反対に図書館などから紹介されて来館する方もいます。

来館者の質問内容、希望によって当館所蔵の現物資料を閲覧に供する場合もあります。当館には平成の大合併前の旧新潟市域を中心とした古文書、写真、民具などの資料が収集、保存されています。ただ、これらの資料は代替のない歴史遺産であることから、閲覧には所定の手続きをお願いします。資料の利用を希望する来館者には当日ではなく、事前に閲覧申請書 (新潟市歴史博物館条

うが、現状は図録をはじめとする刊行物などから探していただいている状況が続いています。

もう一つ対応を考えさせられる場面は、利用者の質問に対しどこまで調べるかです。一般的な質問なら当館所蔵の蔵書などで解決できるものもあります。これに対して、例えば利用者の家や地域の歴史に関する個別で詳細な話などとなると既刊の図書には記載がなく、原資料にあたって自分で調べ、明らかにする必要がある場合もあります。利用者自身が調査研究に取り組めるのが理想ですが、そこまで用意がない場合、学芸員が利用者にとってどこまで調査するのか、悩ましいところがあります。実際問題としても、新たな歴史情報を発掘するのは容易ではなく、時間的・金銭的コストも要するものだからです。

そのため、当館のレファレンスの場合は、基本的に利用者が調査の主体で、学芸員、司書はあくまで補助をするというスタンスを取っています。つまり、当館の蔵書や所蔵資料を見ていただき、それでわからないことについては、利用者が独自調査で明らかにすべきこととしているのです。

レファレンスの今後

当館のレファレンス対応件数は、特に電話など非来館者対応を中心に



調査対応する司書

年々増えています。今後レファレンス対応をより良いものとするためには、情報を公開していくとともに、学芸員間で情報を共有していくことが必要です。

情報公開という点では、インターネット上の目録公開、また資料画像公開が考えられます。目録の紙媒体での出版が難しいこと、絵図など大型資料の閲覧が困難であることがあるため、インターネット上でデジタルデータとして公開することに一定に意義があるからです。ただ、デジタルデータの作成と整備、そして継続にかかるコストをどう捻出するかなどの問題があり、導入は今後の課題です。

学芸員間の情報共有という点では、学芸員内部でのレファレンス集がすでに作成されています。特に明治時代以降の歴史については、出版物に載っていないような細かな事実が多くあり、レファレンスとして蓄積し、次回以降の質問に役立てることは有効だと考えられます。

レファレンスは、利用者や博物館を直接つなぐサービスであり、身近で博物館の利用価値を実感できる場面と考えられます。今後も少しずつでもレファレンスの充実に努め、博物館の存在意義を発信していければと思います。

(たじま ゆうすけ 学芸員)



ライブラリー書庫



情報ライブラリー

え？展——近代絵画のわすれもの

今年度最初の企画展として、「え？展——近代絵画のわすれもの」を開催しています。文字通り「え（絵）」をテーマにした展覧会ですが、いわゆる美術絵画の作品展ではありません。生活や産業の営みの中で生産されたさまざまな実用目的の絵をとりあげ、その描画の特性を機能面から問い直そうというものです。

* * *

「お宅に絵画はありますか？」
こんな質問をされると、拙宅にそんな大それたものはありませんとか、祖父が買集めた軸があるはずとか、お父かたそんな答えが返ってきます。「絵画」という言葉を、多くの人が「美術品」という意味で理解していることがわかります。

本来「絵画」とは、単に「平面に描いたもの」という物理的な状態を示しているにすぎません。その意味では、印刷された絵はがきや「へのへの」も「じ」も立派な絵画といえそうですが、それが多分に美術品というニュアンスを含むことになったのは、明治期の殖産興業政策で使われたことと関係しているでしょう。

明治六（一八七三）年、文部省が幼児むけの教材に絵画という語を用いました。言語的な説明を抜きに遊びながら学習できるように意図されたのでしょう。やがて一〇年代に作品を

展示即売する「絵画共進会」が催されます。新潟では県会議事堂で「新潟絵画展覧会」が三十三（一九〇〇）年に開かれました。当時は「絵画」も「展覧会」も、新しい響きをもっていたのでしよう。新聞は、下駄や呉服の品定めとは違う態度が必要だとくぎをさし、展覧会で美術思想を養うべきだと促しました。

* * *

それ以前に広く使われていた語に「書画」があります。書も画も同じ平面上で一体的に味わってきたのです。しかし西欧の博覧会では出品分類に「Fine arts」の「Painting」とあって、旧来の概念のままでは、どうもすわりが悪かったのです。そこで「絵」の技術要素を独立させ、これを「美術」分野の「絵画」と規定したのでした。

美術とみなされた絵画は、輸出向けの工産品を彩る「百技の長」などと目され、そのための専門教育も制度化されました。そして、文部省美術展覧会をはじめとする公募展に多くの絵画が出品され、それらが日本の近代美術史をかたちづくってきたのです。

* * *

いっぽうで、実用目的の図絵は、日々膨大に生産されています。しかし、モノとしての体系的な蓄積は多くありません。使われて消費される視覚情報として扱われる宿命から、用が済めば捨てられることが多いからです。

実際、何が描かれているかを参照するだけでなく、支持体や描画材、印刷方法といった構造に気をとめる人はほとんどいないでしょう。しかし、そうした物質的な特徴にあえて着目すると、それが誰にむけて何の目的で描かれたのか、その役割や技術史的な背景が浮かび上がってきます。

* * *

たとえば、銭湯に富士山などの「ペンキ絵」があります。一般に美術品として鑑賞されることはありませんが、爽快な眺めの「仮想の窓」として親しまれています。ただ、つねに高湿な環境にある浴室に、恒久的に絵を設置するのは容易なことではありません。戦後は耐久性をもった塗料が開発され、下地に鋼板が採用されますが、それでも定期的なかき替えは欠かせません。絵の内容は、じつはかき替えごとに進化してきたのです。

* * *

こうした日常的に使われ、あるいは消費される絵を、本展覧会では「絵像」「図式」「図案」「模像」という四つのキーワードで紹介しています。明治時代に唱えられた「美術思想」なるものを手がかりに、一般に「絵画」とみなされなかった実用絵を独自に分類したものです。

ただし、これらの絵が「絵画」の資格を有しないという認識は、あくまでも、近代という時代がもたらした誤解であ

ることを重ねて強調しておきたいと思っています。それを描いてきた人間の営みは、美術品と称される品物にのみ、蓄積されているわけではないのです。
(きむら ひとやす 学芸員)

木村 一貫



中央区の菊の湯で使われた「ペンキ絵」。菅原嘉子次（すがはら・かねじ）による昭和後期の作。女湯側（左）と男湯側（右）を意識した構図になっている。（新潟市歴史博物館蔵）

歴史さんぽ

大山～榎町あたり

新潟市東区大山・榎町

新潟の町は巨大な砂丘の上にあります。舗装された道路や建造物に囲まれて暮らしていると気づきにくいのですが、先に放送されたNHK番組「プラタモリ」では海岸縁の坂や内陸部の微高地に砂丘の痕跡を見せてくれました。大山から榎町あたりも砂丘を実感できる場所の一つです。通船川を背に大山の坂道を登ると大山台公園があります。公園に立つ「津波ひなん場所」の看板によれば地盤の高さは12.4m、かつては20m以上の高さがあったようです。公園の展望台に上ると眼下に街並みが広がり、砂丘の高さを実感できます。明治末の地図を見るとこの場所は物見山から続く砂丘の西端にあたります。しかし現在の大山台公園の東側は急斜面になっていて、住宅地へと続きます。

ひと連なりだった砂丘の形を変えた理由は貨物鉄



大山台公園の東側斜面

道の敷設です。大正時代、山ノ下の臨港埠頭建設に伴う整備の一環として、砂丘を削って線路が敷設されました。公園東側の急斜面はその痕跡なのです。削り出した砂は焼島潟の埋め立てに使われました。焼島潟とはかつて通船川川口に広がっていた水面で、松ヶ崎掘割の決壊によって阿賀野川の流路が変わり、次第に形成されたようです。江戸時代末ごろには焼島潟の名が確認されます。水面の利用に関しては、規模の大きな漁撈等の記録はないのですが、この界隈では沼垂・蒲原・山ノ下新田が漁撈の権利を共同で持っていました。また焼島潟南岸には山ノ下枝村の榎集落が移転して湿地を拓いて農業を営んでいたこと、さらに田に客土するゴミ掻きの採取地になっていたことから、亀田郷や西蒲原郡の低湿地帯に見られる、漁撈や採集を交えた複合的な生産活動の場になっていたと思われます。

潟の風景はかつて日本海沿岸に広く見られましたが、その多くは姿を消しています。湿地から陸地へと遷移していく過程にある潟は、本来消えゆく宿命のものとはいえ、かつては長い時間をかけてきた地形の変化は急激になっています。焼島橋から大山方向を向くと大山台公園の展望台が見え、山の下閉門排水機場方向を向くとかつての焼島潟の名残を感じさせ、榎町方向を見ると埋め立て地に建つ大きな工場群を一望できます。こうした景観から、この地が経てきた変化を目の当たりにできます。

森 行人（もり ゆきひと 学芸員）



焼島橋からの景観(山の下閉門排水機場方向)

おすすめの1冊

明治維新を読みなおす ——同時代の視点から——

「薩長同盟」「船中八策」が、坂本龍馬の言葉でも、当時の人々の言葉でもないのを知っていますか。孝明天皇の「攘夷決行」とは、外国船への攻撃のことではないと知っていますか。

明治維新は、後に新政府を担った人々が自らの正当性、英雄性を示すために編んだ歴史として語られはじめました。著者は、幕末維新の政治過程について、史料がどのようにつくられたのか、その言葉をいつ、だれが、どのような意図で用いたのか、きちんと史料を読み、言葉の淵源をたどりまわす。幕末維新を生きた人々の考え方に基づいて、言葉や、史料を、史実をどう直す仕事をします。こうした史料に対する態度は、幕末維新の歴史だけでなく、歴史を学ぶ人すべての基本です。予想される「明治維新一五〇年」キャンペーンの前に、一読すべき本です。ちなみに、奥付の経歴には記載されていませんが、著者は関屋中学校の出身だそうです。

(伊東 祐之 副館長)



青山忠正著
清文堂出版
2017年2月

高等女学校の広がり

明治・大正期における現新潟市域を例に

新潟県高等女学校の誕生

明治三十二(一八九九)年、高等女学校令が公布されました。明治政府は「女子に須要なる教育を授け」場として、各道府県に対して道府県立の高等女学校を少なくとも一校開校させることを義務付けました。新潟県は明治三十三年、新潟市に新潟県高等女学校(以下、新潟高女)を開校させました。当時の女学生の学校生活はどんなものだったのでしょうか。

明治三十八年の『新潟県高等女学校生徒服装心得』によると、着物は筒袖で華美でない色柄の木綿物、袴は海老色の木綿物で、裾に黒の袴章を付けることが義務付けられています。化粧はもろろん、リボンやかんざしの使用も禁止でした。女学生の華やかなイメージとは裏腹に、新潟高女の女学生たちは、質素なものを身に付ける様に指導されていました。良妻賢母を育成するため、質素節約をよしとし華美なものを禁じたようですが、これは社会に突如現れた「女学生」という人々に対する、世間の好奇の目や厳しい目から女学生たちを守る役割も果たしたと思われるます。卒業生の回想にも「女学校というものが初めて出来たものだからあらゆる人々から好奇心で見られよきにつけわるきにつけ一々批評的となりました。新聞社なども今より暇だったと見え、僅かの事でも(新聞に)出すので

す。」とありました。先生方も生徒を思うが故に厳しく指導したようです。

明治四十年の『新潟県立新潟高等女学校規則』によると、修業年限は四年、尋常小学校卒業以上を入学資格とし、授業は週三〇時間でした。科目目は、女子に須要なものとして、裁縫、家事科、教育、手芸がありました。男子の中学校にはある博物、法制・経済、実業の授業がなく、また、英語・数学の授業時間は中学校の半分でした。中学校と高等女学校は、単に男女別学というだけでなく、教育内容も異なっています。男子と女子では教育の目的が違っていたのです。

当時の女学校の授業の様子として、「理科室は特別室で階段様式で、明暗自在、準備室がふたつき立派でした。大学の講義室みたいな立派な室で、あの教室に入ると偉くなったような気がしましたわ。」とか、「裁縫は、だいたいは、ベビイ、ポルカなどを盛んにやり、お客様がいらつしやると、それを講堂でお目に掛けました。」と卒業生は回想しています。

志願者の増加

新潟高女開校時は生徒が集まらず、当初の生徒募集期限を一週間延期しました。関係者は生徒集めに奔走し、初代校長の柏倉一徳も受験資格のある生



明治43年 新潟高女第一学年修了記念写真

徒に受験を勧めるため、県下の小学校を回ったそうです。

女学校が社会に浸透し、景気の影響などもあり、徐々に入学希望者が増加しました。志願者の増加を受け、大正三(一九一四)年には、これまで二学級一〇〇名だった入学定員を一学級五〇名増加させました。志願者数はそれを上回る勢いで激増し、七年には入学志願者が二五〇人を超えました。九年は三七五名もの志願者があったため、一五〇名の合格を発表した後、定員を一学級増やし、再募集を行いました。十二年には、五学級二五〇名になりましたが、志願者数三八二名と、相変わらず狭き門でした。大正期の慢性的な入学難は中学校でも同様の状況で、受験競争を引き起こしていました。小学校では中学校や高女の入学準備のための特別教育が各学校で行われ、進学希望者に対し放課後の補習などが行われていたようです。六年間の教育内容を五年間で終わらせ、残りの一年を総復習として進学希望者の受験対策にあてるといった極端な小学校も現れたようです。

藍野かおり

教育機会の拡大

明治四十三(一九一〇)年、高等女学校令の改正で、裁縫などの実学を重視する「実科高等女学校」の設置が認められました。実科高等女学校は、地域の事情により高等小学校との併置が可能でした。これを受けて、大正二(一九一三)年に、巻町に西蒲原郡立実科高等女学校が開校しました。また、鉄道の開通により大正期には交通の要衝となっていた新津町も、中等学校誘致を行い、大正九年に町立実科高等女学校を開校します。この二校は大正十年に高等女学校に組織変更し、その後、県立に移管されました。

亀田町では大正十一年に、白根町は翌十二年に、高等小学校併設の町立実科高等女学校が開校しました。このように大正期を通して新潟近郊の中心地に女学校が設立されました。

新潟市では、新潟高女に次ぐ第二の受け皿として、大正十年に新潟市立実科高等女学校が沼垂尋常高等小学校に併設されました。十四年には高等女学校に組織変更し、校舎も新築されました。

明治・大正期の女子中等教育は、教育機会拡大を望む地域の声に応じるため、「実科高等女学校」という制度を足掛かりに、地域によっては、高等女学校へ組織変更することにより、学校の設備や教育内容の充実を図っていたのです。(あいの かおり 学芸員)

長寿な倭人と高齢化社会

私は、この三月末のある日、地元新聞の五日分のお悔やみ欄を見て、改めて社会の高齢化ぶりに驚きました。

亡くなられた四二名の中に、満一〇二歳の方が見え、九〇歳以上は一四名です。九〇歳以上で亡くなった方が三人に一人を超え、八〇歳以上では五八パーセントに及ぶのです。

そこで想い出されたのが「其の(倭)人は寿考(長生き)にして、或いは百年(歳)、或いは八、九十年なり」という、邪馬台国を記した三国志魏志東夷伝倭人条(以下魏志倭人伝)の一節です。魏志倭人伝は、すでに高齢化社会の様相を述べていたのか、と一瞬思ったりしたのですが、だが待てよ、そんなはずはないと、八世紀初頭の古代戸籍や計帳(課税台帳)で、年齢がわかる人々の様子はどうか、調べてみました。

人は確認できず、九三歳が一人、八〇代は山背国でおよそ五〇人に一人、美濃国でおよそ二〇〇人に一人、下総国・筑前国でおよそ一、〇〇〇人に二人という割合でした。偽籍が明瞭な平安時代戸籍と違い、これら八世紀前半の戸籍や計帳は、年齢に信憑性があると考えます。そこで、五〇戸一里の人口をおよそ一、二〇〇人として見てみると、各里に八〇歳を超える老人が少なくとも二〜三名は居る。九〇歳以上もまれではあるが居たりする。一〇〇歳の人も極々まれに居るかもしれない、そんな社会像が浮かんできます。倭人が長生きで、「或いは百年(歳)、或いは八、九十年なり」と記すことも、あるいは当たらずとも遠からず、間違っているとも言えないと思ひ至り、史料読解の難しさを確認した次第でした。

収蔵資料紹介

大正六年「大漁日誌」

明治大正期、新潟港を基地として遠くカラフト・沿海州等のロシア領へ出航し、鮭・鱒漁を行う北洋漁業が展開していました。北洋漁業家の一人田代三吉は、明治一〇年代にはカラフトに向いて魚を買い集め商売をしていたとい、その後本格的に北洋漁業に参画していききました。今回紹介する資料は、明治四〇年代から大正期にかけて、田代家の北洋漁業経営が全盛であった時期の漁労日誌です。日誌の概要並びに記事の一例を記します。

大正六(一九一七)年に田代はカムチャッカワルワヤムスキー第二漁場を借区します。同年五月二十四日に田代の生田丸(二四四トン)は新潟港を出港し、七月初旬に現地に着、七月十五日より操業を開始。八月二十七日に漁を終了し、同二十九日には期間中漁獲した鮭・鱒を積載し借区を後にしました。積み荷の総量は、鮭三三、四八一尾、鱒五〇、四二尾、鮭ノ子七樽、鱒ノ子三樽でした。以上が日誌の概要です。

日誌の記載は簡潔で、風向き・天候・鮭・鱒の漁獲量、併せて特記事項を記載する構成となっています。特記事項の例としては、「六月拾七



日ヨリ七月四日迄縫航ニテ解水ノ時期ヲ待ツ」という記載があり、漁区に到着して荷物を陸に荷揚げするまでの間、水結した海上に滞在を余儀なくされたようです。また、「早朝鱒ノ群来甚シク、従業員一同全力ヲ盡シテ陸揚ニ務ム人員ノ不足ヲ感ゼリ」前日群来ノ鱒通り過ギタルニヤ、本日ハ網漁不足ナリ」「昨夜曳網ナセシニ網一杯の魚ニテ如何トモナス能ハズ、□時機を失シ全部放棄スルノ止ムナキニ至リ徒勞ニ帰セリ」など、漁場での悲喜こももが記されています。その他、ロシア人との売買もあって、当時の北洋漁業の実態の一端がうかがえる貴重な資料です。(若崎 敦朗 学芸員)